

身をわくる事のかたさにます鏡影ばかりをぞ君にそへつる

〔今昔物語 二十四〕參河守大江定基送來讀和歌語第四十八

今昔大江定基朝臣參河守ニテ有ケル時世中辛クシテ露食物无カリケル比五月ノ霖雨シケル程、女ノ鏡ヲ賣リニ、定基朝臣ガ家ニ來タリケレバ、取入レテ見ルニ、五寸許ナル押覆ヒナル、張宮ノ沃懸地ニ黄ニ蒔ルヲ陸奥紙ノ覆キニ裹テ有リ、開テ見レバ、鏡ノ宮ノ内ニ、薄様ヲ引破テ、可咲氣ナル手ヲ以テ此ク書タリ、

ケフマデ抄マデ十訓トミルニ涙ノマスカバミナレヌル抄カダヲ人ニカタルナ

ト、定基朝臣此レヲ見テ、道心ヲ發タル比ニテ、極ク泣テ、米十石ヲ車ニ入レテ、鏡ヲ賣ル人ニ返シ取セテ、車ヲ女ニ副ヘテ遣ケル、歌ノ返シヲ鏡ノ宮ニ入レテ遣タリケレドモ、其ノ返歌ヲバ不語ヲ、其ノ車ニ副ヘテ遣タリケル雜色ノ、返テ語ケルハ、五條油ノ小路邊ニ、荒タル檜皮屋ノ内ニナム、下シ置ツルトゾ云ケル、誰ガ家トハ不云ヌナルベシトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔拾遺和歌集八〕大江爲基がもとに、うりにまうできたりける鏡のつゝ、みたりける紙に、書付て

侍ける、

よみ人しらす

。けふまでとみるになみだのます鏡なれにし影を人にかたるな

〔台記〕久安四年四月廿日丁未、亥刻、鏡宮鳴動、泰親占之云、病事口舌、

〔兵範記〕嘉應元年十月廿六日戊申、巳刻、參法勝寺、略中、先太神宮御料各大備一具、内宮安、外宮安、端、鏡

宮、幣宮錦蓋、麻桶、線柱、玉佩、已上安、辛櫃蓋置筵上、略中、一備置了頭中將參進先開鏡宮蓋備天覽

略○下

〔後拾遺和歌集十九〕かくて臨時の祭になりて、二條前太政大臣中將にはべりて、祭のつかひしはべりけるに、あるじ、はこのふたに、ぢんのくし、白金のかうがひ、かねのはこに鏡などいれて、使は